

# 笑わなかった少年

小川未明

青空文庫



ある日のこと、学校で先生が、生徒たちに向かつて、

「あなたたちはどんなときに、いちばんお父さんや、お母さんをありがたいと思ひましたか、そう感じたときのことをお話しく下さい。」と、おつしやいました。

みんなは、目をかがやかして、手をあげました。最初にさされたのは、竹内でありました。

「私が、病気でねていましたとき、お父さんは毎晩めしあがるお好きな酒もお飲みになりませんでした。そして、お母さんは、ご飯もあまりめしあがらず、夜もねむらずにまくらもとにすわつて、氷まぐらの氷がなくなれば、とりかえたりしてくださいました。僕は、コツ、コツと氷の碎ける音をきいて、しみじみとありがたいと感じました。」と、答えました。

先生は、これをきくと、おうなずきになりました。ほかの生徒たちも、みんなだまつて、おとなしく聞いていました。そのつぎに、さされたのは、佐藤でありました。佐藤が、立ちあがると、みんなは、どんなことをいうだろうかと、彼の顔を見守っていました。

「僕も、やはり竹内くんと同じのであります。いおうと思つたことを、竹内くんがみ

んな話してくれました。」

佐藤の答えは、ただそれだけでありました。先生は、こんど、小田をおさしになりました。彼は、組じゆうでの乱暴者でした。そればかりでなく、家が貧乏とみえて、いつも破れた服を着て、破れたくつをはいてきました。くつしたなどは、めつたにはいたことがないのです。みんなの視線は、たちまち、小田の顔の上に集まったのはいうまでもありません。

彼は、立ち上がると、

「私のお母さんは、お金のないときは、自分のだいじなものも売って、僕のためにいろいろなものを買ってくださいます。そんなとき、私はじつにすまないと感じます。」といいました。すると、先生は、

「いろいろなものとは、どんなものですか。」と、おききになりました。小田は、その答えに困つたらしく、しばらく、うつ向いてだまつていましたが、やっと顔を上げると、

「僕の月謝や……また、どこかへ帽子をなくしたときには、お母さんは、自分の着物を売って、買ってくださいました。」と、答えました。

この言葉は、みんなに少なからず動揺をあたえました。なかには、また、くすくす笑

うものさえありました。しかし、先生が、笑うものをおしかりなされたので、すぐに静かになつたけれど、小田は、そのとき、みんなから、なんだか侮辱されたような気がして、顔が赤くなりました。

そのとき、ひとり隣に並んで腰をかけている北川だけは、笑いもしなければ、じつとしてまゆひとつ動かさず、まじめにきいていました。小田は、心の中で、彼の態度をありがたく思つたのです。

小田のお父さんは、もう死んでしまつて、ありませんでした。ひとりお母さんが、手内職をして、母子は、その日、その日、貧しい生活を つづけていました。

彼は、学校から帰ると、今日のお話をお母さんにしたのでした。その日あつたことは、なんでも帰つてからお母さんに話すのが常でありました。これをきくと、お母さんは、「あんまり、おまえが家のことを正直にいったものだから、みんなに笑われたのですよ。」と、目に涙をためて、おつしやいました。

「お母さんが、僕のために、自分の大事になさっているものもなくして、買つてくださるのを、僕がありがたく思っているといつて、いけないのですか。」

「いえ、正直にいつて、すこしも悪いことはないんですけど……。」

こういつて、お母さんは、また目をおふきになりました。

「だが、お母さん、笑ったやつもあつたけど、笑わないものだってありましたよ。笑ったやつは、こんどなぐつてやるのだ。」と、小田が、いいました。

「そんなことをしてはいけません。おまえが、乱暴だから、みんなが、こんなときに笑うのです。どちらが正しいかわかるときがありますから、けつして、そんな乱暴をしてはいけません。」と、お母さんは、おいましめになりました。

小田は、考えていましたが、

「ねえ、お母さん、いつか、家へ遊びにきたことのある、北川くんなどは、だまつてきていていましたよ。」といいました。

「よくものわかる、おりこうなお子さんですね。」と、お母さんは、いつて、また、涙をおふきになりました。

それから、二、三日してからです。小田は、学校へゆく途中で、あちらからきた、北川くんに出遇しました。彼は、今年から学校に上がったという、小さな弟といつしよでありました。

「おはよう。」

「いっしょにいこうよ。」

たがいに、声をかけ合つて、三人が、並んで歩きました。そして、学校の門をはいつたときであります。

「ひとりで、パンが買える？」と、北川くんが、立ち止まって、やさしく弟の顔をのぞくようにして、きいていました。

小さな弟は、だまつて、うなずきました。

「もし、お金を落としたら、兄さんのところへいつてくるのだよ。」と、北川くんは、いつていました。

兄弟を持たない小田は、この仲のいい二人のようすを見て、心からうらやまずにはいられなかつたのです。

「僕たち、お母さんが、かぜをひいてねているので、今日は、弁当を持ってこなかつたんだ。」と、北川くんが、小田に向かつて、話しました。

そのとき、小田は、また自分のお母さんのことを思わずにはいられませんでした。

「いまごろ、お母さんは、いっしょうけんめいで、お仕事をなさっているだろう……。」「そう思うと、お母さんの、お仕事をなさっている姿が、目にありありと浮かんできて、

しぜんと熱い涙がわいてくるのでした。

その日、ちょうど、お昼の前の休み時間でありました。北川の弟さんが、しきりに兄さんをさがしているのを見つけたから、小田は、大きな声で、

「北川くん！」と、呼んで、知らせたのです。

北川は、すぐに走って来ました。そして、弟のそばへ行って、なにかいうのをきいていました。

「だから、気をつけるようにいったじやないか。」という声がきこえたかと思うと、小さな弟は、しくしくと泣きだしました。

小田は、弟が、パンのお金を落としたのだなと悟りました。しかし、いったはずねるまもなく、

「泣かんだって、いいのだよ。」と行って、北川が、自分の持っているお金をやって、弟の頭をなでると、弟は、泣くのをやめて、急に、元気づいて、あちらへ駆け出してゆきました。

「なんて、朗らかな兄弟だろう。」と、小田は、この有り様を見て、感心しました。そのうちに、話す時間もなく、ベルが鳴つてお教室に入り、授業がはじまりま



した。

いよいよお昼ひるになって、みんながお弁当べんとうを食たべるときとなつたのです。ひとり、北きたが川わだけは机つくえに向むかつて、宿題しゅくだいをしていました。

小田おだには、なにかもわかつていました、自分じぶんが、パンを食たべずに、弟おとうとにパンを買かつてやつたことも。この心こころがあればこそ、このあいだも、自分じぶんの話はなしをまじめにきいていてくれたのだと、小田おだは、思おもいました。

「これが、ほんとうの同どう情じょうというものだ。」

そう小田おだは悟さとると、自分じぶんの行こう為いまでが顧かえりみられて、これから、自分じぶんも、ほんとうの正ただしい、強つよい人にん間げんになろうと決けつ心しんしたのでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「笑《わら》わなかつた少年《しょうねん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 笑わなかった少年

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>